

京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬

—吉田南構内A O22区出土資料の紹介—

伊藤淳史

はじめに 文化財総合研究センターが、前身の埋蔵文化財研究センターの設立である1977年から40年を経たことを記念して、京都大学総合博物館での展示『足もとに眠る京都—考古学らみた鴨東の歴史—飛鳥～室町時代編』が、2018年2月14日～6月24日に開催されることになった。この小稿は、そこに陳列する予定でありながら、未報告のままとなっていた構内遺跡出土の平安時代土馬を紹介するものである。

土馬の出土地点 京都大学吉田キャンパスでは、吉田南構内と北部構内で土馬の出土があり、平安時代前半（9・10世紀）の遺構・遺物が濃密に確認される範囲と重なっている。今回紹介する土馬は、吉田南構内中央の220地点（A O22区）から出土した（図49）。そこでは、梵鐘铸造遺構や井戸をはじめ、各種の遺構や包含層から9～10世紀代の遺物が大量に出土しており、概略を報告している⁽¹⁾。

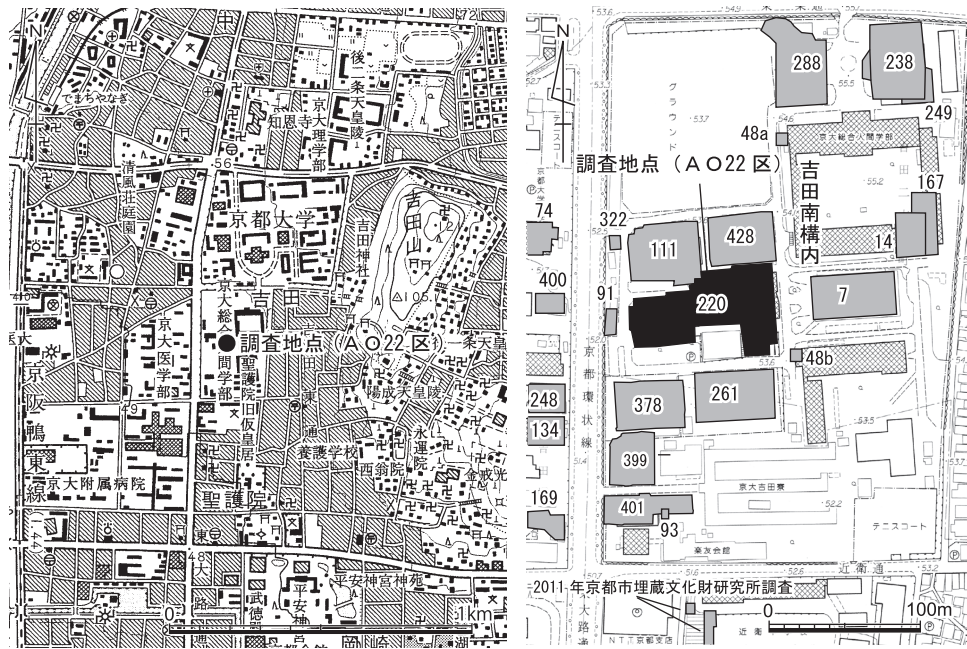


図49 調査地点（A O22区）の位置（左1/25000, 右1/50000）

土馬出土遺構と出土状態 出土土馬は3点あり、うち最も遺存の良い1例(図52-1)は、調査区中央南壁際にある方形井戸SE28から出土した(図50)。この井戸からは、「て」字状口縁手法B₁類の土師器皿が出土しており、9世紀後葉の遺構と同定できる。残り2例(同2・3)は、2がSE28西側の中世土坑SK28、3が12世紀代に比定される井戸SE26から出土し、後代の遺構へ混入と評価すべきと思われる。

想定される製作年代と齟齬のない時期の井戸SE28から出土した1は、廃棄後の移動を被っていない可能性が高い。この井戸は、南辺が調査区外で正確な南北長は不明ながら、東西長約5.6mの方形掘形が検出された(図51)。検出面から約1.8m下に平坦面が形成され、一辺約2.5mの方形掘形がみられる。さらに、そのなかに径約1.3mの円形井筒の痕跡がみられ、底に向かうにつれ次第にすぼまる形態を呈していた。そして、底部に径約50cmの水溜部が明瞭に残り、ここから平安中期と推定される丸瓦と土馬1が出土した。

出土土馬について(図52) 土馬1は、尾の先端をわずかに欠失するのみで、全高6cm(胴部高3cm)、全長5cm。竹管で眼を表し、頭部と頸部の区別が曖昧で、脚は短小である。小笠原好彦の形式分類と変遷観によると⁽²⁾、第Ⅱ段階終末のH~I形式に相当すると思われる。この形式は、平城京東三坊大路東側溝での例から9世紀中頃~末の年代が

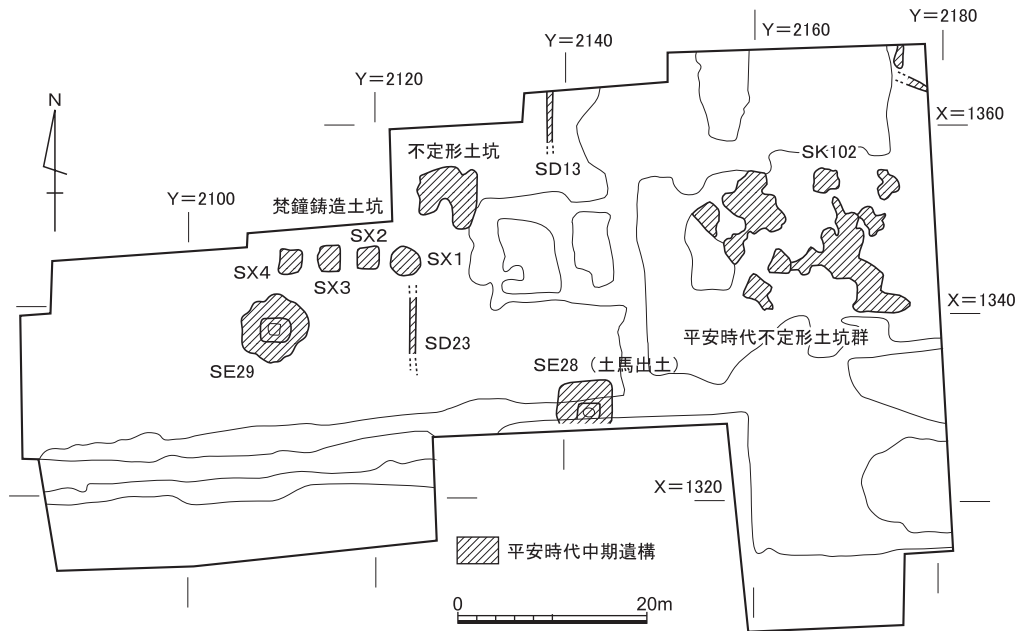


図50 A O22区検出の平安時代中期の主要な遺構 縮尺1/800

想定されている。土馬2は、頭部から背部までの区別も不明瞭で、脚も杜撰なつくりがうかがえる。土馬3は胴部のみで全形不明だが、かなり小型となることは明らかで、これら2点とも土馬1と同様かやや下の段階の製品とみてよかろう。なお、土馬1はきわめて精良な胎土だが、2と3は砂粒混じりの粗い胎土で、遺存も悪い。中世遺構への混入品とはいえ、1と質感が著しく相違する。破損出土が通有ななかで完存に近い点、井戸水溜部から単独出土である点もあわせ、土馬1には特別な配慮が感じられる。

構内遺跡出土の土馬とその意味 吉田南構内では、ほかに、西側の91地点で胴部が、北側の428地点で頭部や脚部、南方の401地点で脚部の出土が報告されている。いずれも破片で、中世以降の遺構や包含層への混入であり、今回の土馬1のような良好な出土例はない。ただし、それらの形態的特徴をみると、小笠原分類のF～G形式に比定できるような、

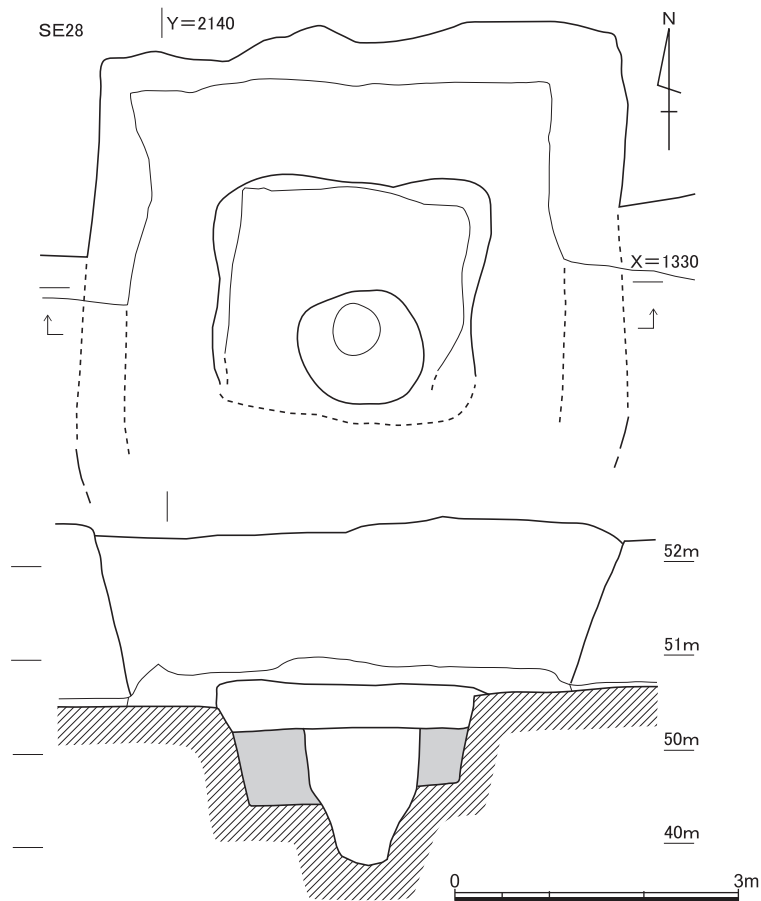


図51 平安時代中期の井戸 S E 28 縮尺1/80

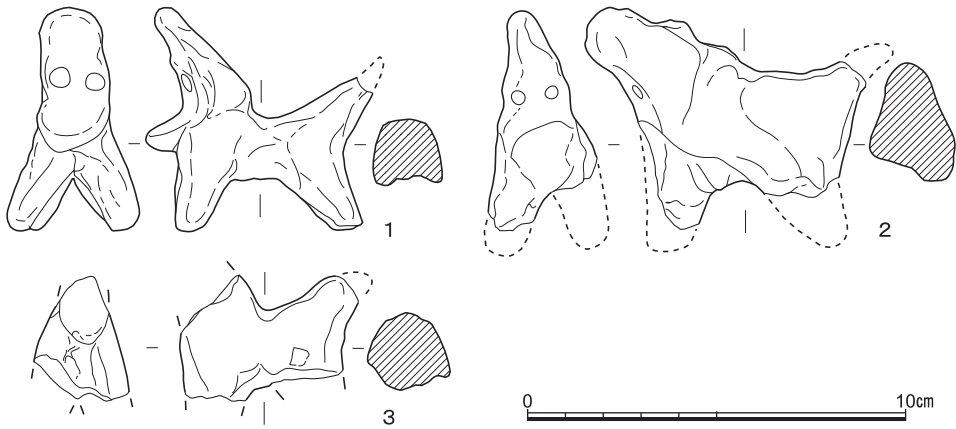


図52 A O22区出土の平安時代土馬 縮尺1/2 (1 : S E28出土, 2・3は中世遺構出土)

胸部が断面U字形に近く、脚部も一定の長さを有するものが含まれる。もう一カ所の分布域である北部構内では、299地点で長脚を有する胸部片が報告され、ほかにも複数の破片が出土したとされる。この299地点例も、今回の紹介例よりも先行する段階の形態的特徴を示している。このように、構内遺跡の出土例総体では特徴に幅があることから、この地の土馬の祭祀は平安期の一定期間継続的になされていた、とみることもできよう。

長岡京期までの土馬は、都城側溝からの大量出土などが知られ、官による祈雨祭祀との関連も想定されているが、平安期以降については同様な出土例をみない。管見では、今回のような宅内井戸などからの1～数点の出土のようである。水にかかわる私的祭祀への変容が予想されるものの、平安期の事例集成と検討による裏付けが、今後必須の課題となる。同時に、平安京の北東郊外に位置しながら、土馬も含めて京内と遜色ない遺物組成がみられる京大構内の平安期遺跡の性格についても、あわせて考察を深めていく必要があろう。

〔注〕

- (1) 伊藤淳史「京都大学総合人間学部構内A O22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』, 1999
- (2) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25, 1975
 奈良～平安期の土馬祭祀に関しては、ほかに以下の文献を参照した
 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集, 1985
 木村泰彦「乙訓出土の土馬集成」『長岡京古文化論叢』, 1986
 久世康博「祭祀遺物」『平安京提要』1994
 上村和直「長岡京における祭祀」『堅田直先生古稀記念論文集』1997